

2020（令和2）年度 京都大学 入試問題 文系 第1問 解答例

問一

体験談を語る人は、話の客観化に心を砕き、非真実を本当らしく語って体験の真実である自己の弱点を隠蔽し、さらにその弱点への囚われをも隠蔽したがつているということ。

*まずは最低限のこととして、傍線部の主語を解答化する。「見抜かれない」の主語は、具体例にすぎない「自分は勇敢だと～人」ではなく、「体験談を語る人」である。

*解答要素として、第1～第3段落の「体験談」関連のキーワード群を適切に用いる。

問二

人間には共有の過敏な弱点があるので、他人を効果的に傷つけうる弱点を識別して非難したいのであれば、自分の過敏な弱点を相手の弱点として非難すればよいということ。

*「他人を有効に罵り（たければ）」をきちんと解答化する。「激しく非難するのに効果がある」などの解答では、「有効」を「効果」と言い換えているだけであり、不十分。「罵ったことで他人をうまく傷つけられる」という説明が必要である。

*「弱点があるのが共通」という意味ではない。弱点の種類には個人差があるから、ただ自分の弱点を並べ立てても、相手の弱点ではない場合には通用しないであろう。「共有の過敏な」弱点（粘膜）であるから、それを突かれると誰もが傷つくのである。

問三

人間が自身の弱点について作品を制作し鑑賞するのは、人間に共有の過敏な弱点に対する興味本位であるが、自己認識が甘く、他人の運命をあわれむことであわれな自己を直視するのを避けるという甚だしい背理であるということ。

*「アウグスチヌスの議論」（例示）を「参考に」とされているが、「劇」への言及そのものではなく、それを参考として、「書き、読む」ことの矛盾について解答する。

*傍線部末の「いかに矛盾しているか」自体も解答表現として適切に置換するのを忘れないように（「甚だしい背理であるということ。」など）。

問四

人間の弱点を真実として暴露するリアリズムの小説は、実人生を形成する多彩な言葉の一部の抽象物であり、人生の無意味さを決定づけるだけで積極的意義がなかったから。

*リアリズムの小説を、トルストイが「否定せざるをえなくなった」理由を本文から見出して解答する。まずは二つの「注」の内容が解答に必要である。さらに、「生の言葉の原

野に較べれば、庭園のようなものであった」という比喻表現の解釈を述べる。「庭園」とは、単なる小さなものの比喻ではない。「生の原野」と対比して考察すること。

問五（文系専用問題）

大勢の人間が人生は意味を隠し持つと思いこんでおり、それを明らかにする意思を捨てきれない。したがって、リアリズム小説の方法が否定されてからも、小説家に類する人々は、人生の外貌を形成する大きな要素である無数多彩な言葉に対し、真実を語る言葉を追求し続けると思われるから。

- * 「これからも」の指示内容は、単なる「今後も」にとどめず、「リアリズム小説が真実を語りえるという信念が失われてから後も」という意味の解答化をしておくこと。
- * 「言葉・言葉にいどむ」とは、「生の言葉の原野」「人生の外貌を形づくっている大きな要素である、人の口から出る言葉・言葉」「言葉の分厚い層の奥」「言葉の霧」などへの挑戦であり、「隠し持っている（と思われる）意味」＝「真実」を語ることへの「捨てきれない意思」である。そのようなことをもくろむ「或る種の人々」とは、かつての「リアリズム（の精神を持った）小説家」とは、もはや異なっているが、いわば「より高度のリアリズム精神を宿した後継の小説家的な人々」である。
- * ここで、「鍵になるのは、**体験談と告白という二つの観念の識別、把握の仕方**である」と言われていることを踏まえなければならない。「体験談」の求める「話の客観化」「事実性」ではなく、「告白 **Confessions**」（アウグスチヌスとトルストイが引かれるゆえんである）において「真実を語る」ことが意図されていることは明らかである。
- * 五行以上であれば、二文で書き、構文・表現のミスを避けたい。